

CSR 推進ネットワーク 第 3 回定例会 プログラム

日時：2011 年 10 月 18 日（水）14:30～17:30

場所：早稲田奉仕園 リバティホール

参加者数：40 名

司会：JANIC 井端

時間	項目
14:30～ 14:35 (5)	開会挨拶（JANIC 富野）
14:35～ 14:40 (5)	事務局からのお知らせ ・ 国際協力 NGO の企業連携実態調査 ・ 広島シンポジウム（11 月 18 日）
14:40～ 15:40 (60)	<p><メンバーからのプレゼンテーション> ～連携相手を探しています～ 各 20 分（Q & A 含む）</p> <p>本気型 社員全員をまきこめる！BAJ の古着リサイクルプログラム『フルクル』 （特活）ブリッジ エーシア ジャパン 沼田京子氏（国内事業担当）</p> <p>本気型 給食で、カンボジアの子どもたちに元気を！ ～100 円で、1 日 3 食 たべることができます～ （公財）国際開発救援財団 中川絢子氏（マーケティング・支援者サービス 担当）</p> <p>アイデア型 啓発プログラム「宴会が飢餓を救う？」 （特活）ハンガー・フリー・ワールド 金井亜紀氏（資金調達インターン）</p>
15:40～ 15:50 (10)	休憩
15:50～ 16:30 (40)	<p>本気/アイデア型 生活習慣病 & 慢性砒素中毒症予防サービス開発のための 企画 （特活）アジア砒素ネットワーク 石山民子氏（東京連絡所）</p> <p>失敗事例共有型 企業の業績に左右されない連携を目指すには （公財）オイスカ 長宏行氏（国際協力部 海外プロジェクト担当部長）</p>

16:30 ~ 17:20 (50)	<p><グループディスカッション></p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンごとにグループに分かれて Q&A、意見交換 (グループ替え 1 回、20 分×2 回) ・全体共有 (10 分) <p>各プレゼンテーターより一言！</p>
17:20 ~ 17 : 25 (5)	事務連絡 (次回日程決め等)
17:25 ~ 17:30(5)	メンバーからの報告事項

配布資料

1. 「国際協力 NGO の企業連携実態調査」について
2. 古着リサイクルプログラム「フルクル」～“社員をまきこむ！”新たな社会貢献の形～
3. 「給食プロジェクト」の概要
4. 病院給食で、子どもたちに元気を！
5. 子どもたちの未来を変える、国際協力

開催レポート

夏の猛暑の中行われた第 2 回定例会を終え、肌寒くなった季節のなか 2011 年度第 3 回目の本定例会が行われた。今回は、CSR 推進ネットワークに加盟しているメンバーの意見をもとに、さらなる企業と NGO の連携促進を図るための“プレゼン大会”を行った。プレゼンは実践的な連携を考える“本気型”とアイデアを共有する“アイデア型”に分けて、NGO から 5 名の発表者が壇上に上がった。発表の後、グループディスカッションを最後に設けて、意見や情報、Q&A などを交わした。

<メンバーからのプレゼンテーション> ~連携相手を探しています~

1. “本気型” 社員をまきこめる！BAJ の古着リサイクルプログラム『フルクル』
(特活)ブリッジ エーシア ジャパン 沼田京子氏 (国内事業担当)

技術習得をテーマに、ミャンマーやベトナムで教育支援、職業訓練支援、井戸建設などの活動をしている BAJ は、企業の CSR 活動と連携した古着リサイクルプログラムを始めている。

これは、主に企業の社員等から寄せられた古着をリサイクル業者が買いとり、対象地域に輸出していくというシステムで、得た資金は BAJ の活動資金となる。古着は輸出先で、無料で渡されるわけではなく、販売品となり現地で売られる。企業のメリットとしては、社

員とその家族を巻き込んだ国際協力活動が簡単に実施できることが挙げられる。企業側へお願いしたいことは送料の負担、社内イントラネットでの告知等。また、今後古着リサイクルプログラムのチャリティイベントを開催していく予定であり、ボランティアとしてご協力いただくことも歓迎である。

Q&A

Q.古着を買い取っているというが、リサイクル業者はいったいどこなのか？

A.日光物産が管理している。当会社の社長は途上国に関心を持っており、熱意が強くある。物流ルートも確保していると聞いた。

Q.企業及び実績報告をどのように行うか？

A.送り状に企業名と古着の量を記載していただく。



2、“本気型” 給食で、カンボジアの子どもたちに元気を！～100円で、1日3食たべることが出来ます～

(公財)国際開発救援財団 中川絢子氏(マーケティング・支援者サービス担当)

地域の自立的な発展のための人材育成を中心とした地域開発、緊急援助を中心に開発途上国で活動している当団体では、子どもの健康増進のため、2006年からカンボジアで国内初の病院給食プロジェクトを行っている。このプロジェクトでは、食事を治療の一環と考え、首都プノンペンの国立小児病院において栄養バランスに配慮した食事を1日3食入院患者に提供している。今年から3年間プロジェクトを継続する予定だ。

FIDRは企業にこのプロジェクトのサポーターとなっていただきたいと考えている。支援方法としては寄付つき商品・サービスの売上の一部支援などの「ビジネスを通じた支援」や、社員食堂でのヘルシーメニュー(カンボジアの給食メニュー提供も考えられる)の提供など健康増進をキーワードにした「顧客や社員の健康増進とリンクした支援」が考えられる。また、店舗、社内での「募金活動」も「100円で、1人が1日3食たべられる」と支

援金額のもつ価値をわかりやすく表せるので、取り組んでいただきやすいと考える。連携企業には、定期的な活動・会計報告をさせていただく。FIDRは、企業による国際協力の推進をミッションの一つとしており、カンボジア初の「病院給食システム構築」という挑戦を、企業と協同して行っていきたい。

Q&A

Q.3年間支援を継続して、その後、(プロジェクト実施地の)国立小児病院に運営を移譲するとのことだが、それはどのように行うのか？

A.費用、人材の両面で、段階を踏んで移譲に向けた準備をしている。給食提供開始後、給食のランニングコストのうち75%をFIDRが負担していたが、今年は50%に減らし、プロジェクト終了時には0%を目指している。

プロジェクトでは院内に「給食部」(病院給食の運営・実施を担う部門)を新設したが、病院の中でも栄養・給食の大切さへの理解が進み、部の重要度が上がってきた。専門的な知識を身に着けている部のリーダーを中心に人材育成を進め、3年後の運営移譲につなげる。

Q.3年間で終わってしまうのか？その後は？

A.国立小児病院が、カンボジアのモデルケースになれば良いと思っている。3年後、何らかの病院給食に関する取り組みを継続する可能性も視野に入れ、プロジェクトを行っている。



3、“アイデア型” 啓発プログラム「宴会が飢餓を救う？」

(特活)ハンガー・フリー・ワールド 金井亜紀氏(資金調達インターン)

ハンガー・フリー・ワールドは“飢餓のない世界をつくる”をテーマにブルキナファソやベナン、バングラデシュなどで活動している。今回アイデアとして挙げた“宴会が飢餓を救う”プログラムは、世界中で深刻化している食料ロス・破棄問題の社会的啓発を目的に、企業の各種パーティーや宴会等で発生した残飯1グラムにあたり1円を、開発途上国の食料ロスの改善プロジェクト(貯蔵庫の建設等)に寄付するといったもの。目

的が、環境問題対策のための ISO14001 という規格に整合しており、また外食産業における食べ残しの割合が多い場所に宴会会場があてはまることから、このプログラムを積極的に促進させていきたい。また、この食料問題は発展途上国だけでなく、先進国である日本の消費者にもリンクをしていることから、日本の問題として企業にご提案の方をすることができる。そのためにもまずは、日本のなかで食料ロス・破棄問題の世論喚起をしていく必要がある。今回は、このプログラムの課題について実際に導入する場合、「残飯が増えれば寄付が増える」という矛盾はどう捉えられるか、社内から導入への反対が想定されるか、環境対策の面ではどういった効果があるのか、一般消費者への啓発に結びつくのかなどといった点に意見をいただければと思っている。

Q&A

Q.この取り組みの提案があがってきた背景に食料問題があったとは思いますが、このアイデアがでてきた根本のきっかけはなにか？

A.事務局長渡邊さんの発案からでてきた。こういった食料問題を改善するために、世論喚起の必要性を感じている。途上国の問題が日本の問題とリンクしているという点を知っていただきたい。



4、“本気/アイデア型” 生活習慣病&慢性砒素中毒症予防サービス開発のための企画 (特活)アジア砒素ネットワーク 石山民子氏(東京連絡所)

アジア砒素ネットワーク(AAN)はバングラデシュで10年に渡り砒素中毒症の予防・改善をするために、水供給、患者支援、農業の見直しを3つの柱において活動してきた。現在、当国は社会的な要因やその他の要因から糖尿病などの生活習慣病が増加している。砒素対策と生活習慣病対策は重複する点が多いため、日本企業の連携による生活習慣病&慢性砒素中毒症予防サービスの開発を検討している。連携によって、AANは現地での事業実施人材の提供や活動拠点を提供し、企業はマーケティング戦略や福祉サービスのノウハウの提供、事業費用の支援など行うといった役割分担を想定している。将来的

に、AAN は生活習慣病と砒素中毒症の予防サービスを現地で継続し、日本企業はこの経験を元にバングラデシュや他のアジアの地域で生活習慣病予防対策のためのパッケージをビジネスベースで展開していくことができるのではないかと。教育や介護など日本のソフトサービスのレベルはとて高いので、新興国であるバングラデシュでも活用していただきたくことを期待している。

コメント

とてもおもしろい点に着目していると思う。バングラデシュの社会開発の新しい取り組みへの理解が得られやすい。



5、“失敗事例共有型” 企業の業績に左右されない連携を目指すには

(公財)オイスカ 長宏行氏(国際協力部 海外プロジェクト担当部長)

失敗事例に関しては、実施前からのご本人からの要望により、非公開とさせていただきます



<グループディスカッション>

NGO メンバーの発表後、グループに分かれてプレゼンについてのディスカッションを

行い、最後の 10 分で話し合った内容を全体で共有した。

<全体共有>

ブリッジアジアジャパン

買い取られた古着がどこへ行くのかを知りたいとの意見を頂いた。得た資金を特定の事業に使う形式や、送り状のフォーマットがあれば、より社員も参加しやすいと思う。

国際開発救援財団

3年後のプロジェクト実施病院への移譲完了後、次はどのようなかという意見・関心が多く寄せられた。また、他に様々な視点からの意見をいただいた。

ハンガー・フリー・ワールド

特に企業側の支援や、宴会を主催する方の視点から意見をいただいた。

アジア砒素ネットワーク

たくさんのご意見をいただいたので、今後の事業につなげていきたい。

オイスカ

覚書だけでなく、連携のチェックリストや同意書などを数多く設けることで、ミスが減るのではないかという意見を頂いた。また、企業が熱意をもって現地とのつながりを意識しており、NGO が引き始めているという点で、事業としては成功ではないかという逆の発想が出来ることも分かった。

